

溝呂木健一先生のご退職にあたって

法学部長 石上 泰州

溝呂木健一先生は、平成17年、法学部法ビジネス学科の教授として本学にご着任され、爾来、16年の長きにわたり、本学の教育・研究、そして管理運営にご尽力くださいました。ことに、平成24年からは法学部長として、また、平成26年からは副学長として、多年にわたり本学を牽引されてこられました。先生のご退職にあたりましては、まさに支柱を失うがごときの喪失感を覚えざるを得ません。

先生は、昭和22年に東京都でお生まれになり、早稲田大学の第一政経学部経済学科にご入学されました。ご卒業後は、株式会社資生堂へご入社され、同社では、香港やタイでの研修・駐在もご経験されつつ、商品開発の部門を中心にご活躍されたとのことでした。そして、平成9年には国際事業部国際マーケティング部長という要職にお就きになり、その後も、資生堂インターナショナルの取締役社長などの重責を担われ続けました。

すでにこの頃から、先生はマーケティングに関する優れたご著作を発表されるなど、研究活動にも関心を拡げておいででしたが、実務経験豊富な教授を求めておりました本学からの懇請をご快諾いただき、ビジネスの世界から教育研究の世界へと転じていただく運びとなりました。先生がご着任された当時、本学の法学部は、法政学科と法ビジネス学科の二学科体制でありましたが、先生は、法ビジネス学科の核となる教授として迎えられ、「マーケティング論」や「経営学」等の基幹科目をご担当いただきました。

先生の授業は、有名企業の花形部門において世界を相手に奮闘されたビジネスマンとしての、さらには、大組織を動かす管理者としての、広く、そして深いご経験に裏打ちされたものでありました。また、本学の学生の多くは一般企業に就職して企業人としての人生を歩んでいくわけですが、そうした学生にとって有益な授業とは何か、興味関心を惹く授業とは何かを頭初から模索、追及されていたりしゃいました。ご着任されるや、先生の講義やゼミに学生が殺到するのも、当然と言えば当然のことであったように思います。

先生は、実務経験に裏打ちされたマーケティング等々の実態や理論を学生に向けてご教授されるわけですが、時に、我々教職員に向けて、本学の現状分析や進むべき方向性についてお話しいただく機会もございました。企業と教育機関の違いこそあれ、経営の現場を知悉された先生のお言葉は、深く首肯させられるものばかりでありました。

先生のご活躍は学内にとどまらず、大学近隣の自治体からも大いに頼りにされており、加須市では、商業振興プラン推進会議の委員長、かぞブランド認定委員会の委員長を、久喜市では、中小企業小規模企業振興会議の会長などをお務めになられました。他にも、全国各地の多種多様な団体の求めに応じて、ご講演活動にも積極的に取り組まれるなど、まさに引っ張りだこの名物教授として、本学の名声をおおいに高めてくださったのです。

そして先生は、教育研究活動だけでなく、本学の管理運営にも、誠心誠意、力を注いでくださいました。特に、前学長として堂ノ本眞先生が就任されるや、法学部長、そして副学長として、前学長の全幅のご信頼のもと、本学をご指導されました。堂ノ本・溝呂木の二人三脚のリーダーシップこそが、深刻な定員割れをひきおこしていた本学を安定軌道へと回復させた原動力であったことは、衆目の一致するところでありましょう。その間の溝呂木先生のご功績につきまして、思いつくままに申し述べさせていただきます。

一つは、大学の「訴求力」を高めることに目を向けるよう、説かれたことです。訴求力とは、そもそもはビジネスの世界で用いられる言葉ではありますが、その商品・サービスを買いたいと思わせる力、というような意味かと存じます。高校生やその保護者に向けて、平成国際大学とは如何なる価値を持った大学なのかを、わかりやすくアピールし、発信することの重要性を、あらためて気づかせていただいたわけですが、それだけでなく、本学が訴求すべきは「スポーツと公務員」であることを喝破され、そこに本学のエネルギーを集中投下するよう説かれました。本学が、「公務員に強い大学」として認知されるようになっているとするならば、それは、溝呂木先生のご指導の賜物であると申し上げて過言ではございません。

また、先生は、常に改革を志向されておられました。大学改革へ向けられた先生の熱意は、本学の改革推進実行本部会に結実しております。同本部会は、学長、

副学長を囲んで改革提案を侃々諤々論じ合う場で、教職員の誰でもが出席して提案することができます。同本部会の設置は先生のご発案によるものであり、先生は、自らその運営を引き受けられ、数々の改革を主導されてこられました。改革の精神を忘れた前例踏襲の組織に未来はないとの信念のなせるわざであったのでありましょう。今日、本学が前へ前へと進む推進力をいささかなりとも保持しているとするならば、それは先生が率先して改革の旗を掲げ続けてこられたことによるものと申し上げなくてはなりません。

他にも、学生第一主義で、とにかく学生の声を聴くこと、等々、「溝呂木イズム」とでも申し上げるべき数々の指針をお示しいただいたわけですが、我々残された者はこれらをしっかりと受け継いで参らねばなりません。甚だ心もとないところもございますので、先生には、どうか、今後とも引き続き、叱咤激励を頂戴いたしたく、お願いを申し上げる次第です。

さて、先生は、お酒、特に日本酒への造詣が深く、しばしば酒席にお誘いをいただきました。カラオケもお好きで、これまた幾度となく楽しい夜をご一緒させていただきました。資生堂のテレビCMが華やかかなりし頃のキャンペーンソングを、当時を懐かしむように歌われているお姿が、印象深く記憶に残っております。そして、前学長の堂ノ本眞先生とは、連れ立って夜の街に繰り出される機会が多々あったようにお見受けしましたが、大学の難局を二人三脚で鮮やかに乗り越えられてきたお二人の、打ち解けたひと時であったのかと拝察いたしております。

ここに、あらためて、衷心よりの感謝と御礼を申し上げ、献辞とさせていただきます。溝呂木先生、本当にありがとうございました。